

近江谷克裕元首席研究員が

私たちに残してくれたもの

生命工学領域 戸井 基道 副領域長

2026年1月過日、近江谷克裕元首席研究員が日本から遠く離れたルーマニアの地で旅立たれました。近江谷さんは、現モレキュラーバイオシステム研究部門の前身であるバイオメディカル研究部門で長く研究部門長を務められたなど、生命工学領域内外の多くの職員と強い繋がりがあった方です。近江谷さんとお付き合いし、研究者としての立ち振る舞いを横で見させてもらった一人として、特に数に現れない産総研内での活躍や私達に与え続けた志について述べつつ、近江谷さんへの哀悼の意を示したいと思います。

近江谷さんは北海道の函館ご出身で、2001年に産総研関西センターへ入所されました。発光生物学をご専門とされ、各種発光生物を追い求めて世界中を駆け回り、発光メカニズムを解明しつつ、それらの発光システムの細胞・生体測定技術への実用化に勤しまれました。入所の年に JST さきがけの研究代表者に採択されていますが、このさきがけ研究者としてのご経験によりいわゆる「先駆ける」研究の重要性を認識したと常々言われており、若手研究者に「さきがけに採択される研究テーマをしっかりと考える」と口酸っぱく指導されていました。実際に当領域内にさきがけ代表研究者が多数いることは、近江谷さんのこのご指導があってこそ、と言えます。2006年から北海道大学医学研究科の教授として一時期産総研を離れましたが、再び産総研に復帰され、その後は生物プロセス研究部門の副研究部門長、そしてバイオメディカル研究部門の部門長と長期に渡り研究現場のマネジメントに注力されました。とは言い研究部門

長になられても近江谷さんの研究への意欲は留まることを知らず、採集や共同研究で海外を飛び回られていました。お留守の間に部門業務を引き受けられていた当時の副部門長の皆さんも大変だったのではないかと思います。近江谷さんが言われていた「研究者たるものどんなポジションでも時間を作って研究をやり続けること」はその通りだと思います。最近でもお会いすると「お前研究やっているのか」と厳しく突っ込まれるのでその度に自省していましたが、その覚悟は忘れるべきではないでしょう。また、国際連携の重要性を主張し、多くの領域研究者を引き連れて様々な海外機関を訪問し、連携構築に奔走されました。今の我々に足りないもの弱ところを真剣に案じ、どうすべきかを具体的に示して頂いていました。



最後に個人的には、大の酒好きであった近江谷さんの最も顕著なご功績は、老若男女を問わず多くの職員に気兼ねなく声を掛け、想像もしていなかったメンバーでの飲み会の場を作り続けたことだと思っています。「飲もうよ」と言われてお店に着いたら「初めまして」から始まることも多々ありました。近江谷さんの偏食によりお店選びには苦労しましたが、その場から今の領域を支える素晴らしいメンバーを育てて頂いたと思っていますし、これからも近江谷さんの志が引き継がれて多くの研究者が活躍していくのだらうと信じています。

The Research Institute of the University of Bucharest のウェブサイトにも追悼文が掲載されています。

“In memoriam Yoshihiro Ohmiya, visiting professor at ICUB”:

<https://icub.unibuc.ro/in-memoriam-yoshihiro-ohmiya-visiting-professor-at-icub/>



近江谷 克裕さん

モレキュラーバイオシステム研究部門

鎌形 洋一 招聘研究員

研究を愛し、人を愛し、人の繋がりを愛し、旅を愛する人だった。わずか一ヶ月前、乾期の真っ只中の爽やかなタイの夕暮れ時に三日間、ビールを飲みながら、研究や社会のできごとを話したばかりだった。それは私達にとってごくありふれた時間だった。昨年秋から始まったブカレスト大学での生活が三ヶ月を迎え、その間に会った人達や、歌劇場の前で民族楽器を爪弾く音楽家の写真なんかをちよちよ送ってきてくれた。タイではそんなルーマニアでの生活の様子や、かつてのチャウシェスク政権で苦労した人達の話をしてくれた。

17年前、私は北大医学部に転籍していた近江谷さんを研究所に戻ってくるよう誘った。それから一緒に働く時間が始まった。最初は副部門長として、その後は同じ部門長として、実にさまざまなことを一緒に行った。彼は仕事が早く、面倒な事を片付けたら、すぐに自分の研究のためにあちこち出かけた。時間や〆切りには最期の最期まで正確で、総説の原稿や論文査読は必ず〆切り一週間前には終わらせていた。国内にも国外にも驚くほど多くの知り合いと活動拠点を持っていて、生物発光化学発光研究会の世話人代表もしながら、さまざまな生物発光研究に関わっていた。ウミホタルやヒカリコメツキムシのルシフェラーゼに関する数多くの研究論文、国内外特許と製品群、生物発光光源の国際標準化などもそうした中で生まれてきた。それに加えてインドネシア、インド、タイなどの共同研究の立ち上げや運営、

国内企業との連携にも秀でていた。ざっくりしているようでいてロジスティクスは緻密だった。ヨーロッパから帰って来て一日を歩いてインドに行ったりするのも平気だった。とにかく誰も真似なんかできないことばかりだった。

若手の研究者たちとの交流が好きだった。生き物を相手にしている研究者とは特に気が合った。私はそうした研究者とともに富山の発光ゴカイやホタルイカの採集や試料調製に何度も同行させてもらったが、長らくお世話になっている魚津の水族館の館長さんから若手スタッフに至るまで気軽に話ができる人だった。これほど分け隔てがなく、時おり開陳する自慢話も鼻につかない人はほとんど見たことがない。

亡くなるわずか二週間前のタイでのシンポジウムの「締め挨拶」で、彼は人と人との交流、世界の研究者ネットワークがいかに大切かを繰り返し強調していた。いつも口にしてのことだった。彼の最後の寄稿文は1月22日づけでカルナバイオサイエンスのHPに掲載されている。それは亡くなるほんの数日前のもので、旅を続けた人生の果ての最期の紀行文になってしまった。ブカレスト>日本>タイ>ブカレストと回遊し、それぞれの国が持つ近隣諸国との関係性、そしてこれらの国の十字路国家として持つ役割を語り、日本が果たしてその任を担っているのか、に疑問を投げかける文章で締めくくられている。

私はこの数週間のあいだ、彼が果たしてほんとうにこの世から姿を消したのか、繰り返し自問している。やりたいことがあり、やらなければならないことがあった。だから、ブカレストで仕事をする道を選んだのだ。「いやー、楽しかったよ、はい、これ、おみやげのワイン」と言って、いつものように姿を現す気がしてならない。近江谷克裕さんのことは私の中ではまだ思い出でもなんでもない。



近江谷さんとの旅行記

モレキュラーバイオシステム研究部門
三谷 恭雄 部門長

旅の始まりは初夏のノルウェー

近江谷さんと研究で一緒させていただき始めたのは、2010年のこと。「今度ノルウェーに光るサメを取りに行こう！」と声をかけられ、その2ヶ月後の6月にはフィヨルドの町、ベルゲンに降り立ちました。ベルギーの研究者たちと合流し、空港でお酒を仕入れて現地大学の臨海施設での合宿が始まりました。夜更けの夕日を眺めながらのワインは最高でした。ほんとにサメが光るのか疑問でしたが、弱いながらも青白く光る姿に発光生物の不思議を感じました。写真は、サンプリング時にスタッフ用作業着で乗船前に撮影したもの。



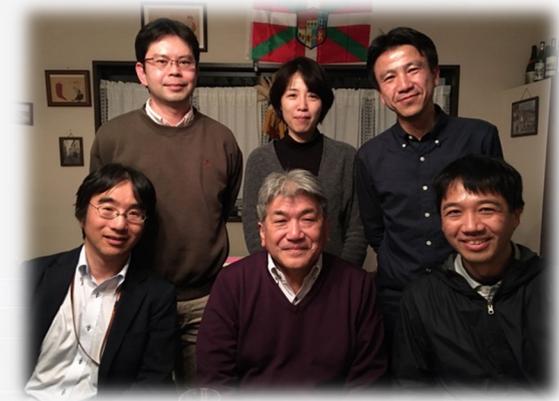
シベリア、台湾、中国、タイ、インド、ブラジル、、、

少し思い返しただけでも近江谷さんとは実に多くの土地に足を運びました。シベリアではウオッカ、台湾・緑島では高粱酒、中国では白酒、タイではシンハー、インドではキングフィッシャー、ブラジルではカシャーサと各地の美味しいお酒で歓迎していただき、現地の研究者の方々の近江谷さんに対する熱い歓迎ぶりを窺い知ることができました。写真はブラジル・イグアス。生物発光に関係する2年に一度の国際学会が、2024年6月、巨大な滝で有名なこの地で開催されました。私にとっては近江谷さんとは3度目のブラジル。「わざわざ来た海外で学会だけ出ても意味がない、現地大学にも行こう！」と若手研究者を誘い、一緒したことも近江谷さんの研究者哲学の片鱗に触れる良い機会になりました。もちろん、そこでも熱い歓迎を受け、議論も弾みました。



これからの旅路

昨夏、近江谷さんがルーマニアから日本に一時帰国した折、「自宅に残したワインがあるから一緒に飲み干そう！」と誘われ、ご自宅に伺いました。今思えば、直接お話できたのはこの時が最後でした。「ルーマニアの黒海に面するドナウデルタには未同定の発光生物がたくさんいるから一緒に行こう！」と誘われ、ぜひ来年には、と約束していました。ゴカイ、ウミホタル、渦鞭毛藻、ホタルイカなどまだまだこれから一緒に取り組んで行きたい発光生物がたくさんありました。これからは近江谷さんの遺していった言葉を励みに取り組んで参ります。写真は2020年2月に近江谷さんが定年を前につばを離れ関西センターに異動となるタイミングで、身近に交流のあった産総研関係者で送別会を催した時のもの。翌日、近江谷さんからは、「私は基本的に別れは苦手です。なので、何となく送別会といわれると、出たくない方です。でも、昨日は別れというより、皆さんと、また、どこかに行きたいという門出の時間を共有したように思います」とのメールをいただきました。私にも近江谷さんとの別れはまだ訪れていません。オンラインで声を聞いたのは年初1月15日が最後となりましたが、その時にいただいたメッセージを胸に刻みつつ新たな門出としたいと思います。近江谷さん、ありがとうございました。私たちの新たな門出に、乾杯！



報告：所内交流トークイベント 2

38号の本誌で開催をお伝えしていた所内交流トークイベントですが、テキサス大学オースティン校の宮澤先生にご登壇いただいた12月の特別版をはさんで、1月から当初予定のプログラムが再開されました。

1月は細胞分子工学研究部門の若手ワーキンググループに企画してもらいました。バイオものづくり研究棟が開催場所ではあるものの、トークテーマは自由発想で設定してよいことにしており、第2回は若手研究者ならではの切り口で、第1回とは趣を大きく異にする『研究者の出産・育児に関するワークライフバランスについて』でした。同部門の2名の若手研究者には、ご自身の経験談を含んでの興味深いトークを展開していただき、短い時間ながら質疑応答まで対応していただきました。

以降、2ページ余りでレポートしたいと思います。



トークイベント会場の様子

イベントの様子

第1回のトークイベントは、バイオものづくり研究棟(6-4棟)の入り口すぐのロビーで実施しましたが、今回から同棟の会議スペースで実施することになっています。

前掲の写真はイベント開始直後のものですが、既に30人近くの方が会場に集まってくださっていることが分かります。写真には写っていませんが、千葉領域長、戸井副領域長、細胞分子工学研究部門の小松部門長も会場にお見えでした。生命工学領域の職員はもちろんのこと、今回は他領域からも現地参加して下さる方があり、小さな一歩ではありますが、本トークイベントが目指す『所内交流』が叶ったように思います。

第2回のトークイベントは、細胞分子工学研究部門の吉原さんが司会役を務めてくださり、ワークライフバランスを取り上げていることもあって第1回よりは少し早めの15時半に始まりました。

最初の話題は『私の産休・育休の1年と復職』というタイトルで、赤木祐香さんが提供してくれました。ご自身の経験を共有いただくだけでなく、調査なされて実際にいくつかは利用なされたという研究所の内外の制度を整理いただくなど、これから同様の経験をするであろう後進研究者にとっては大変ためになる情報を披露いただいたと思います。女性研究員数が明らかにまだ少ない産総研においては、出産を経て研究職に復帰されるという経験を共有してもらえるチャンスは貴重だったのではないのでしょうか。

2番目の話題は『ある男性研究者視点での出産前後備忘録』というタイトルで、吉富廉さんが提供してくれました。夫婦で育児をするのがスタンダードになりつつあるとはいえ、社会自体がまだ慣れたとは言えない男性の育休取得に始まるご自身の経験談を、ユーモアを交えてお話しくださいました。特に口裏を合わせたわけではないようですが、絶対に便利、とご紹介くださるサービスが赤木さんと丸被りすることもあり、確度の高い情報をご提供いただけました。

開催時間帯の関係もあり、トーク後の懇親会は第1回とは異なってソフトドリンクのみの提供でした。それでも半数近くの方が会場に残って登壇者への質問を行っていましたので1時間の懇親会はあっという間に終了時刻となりました。

鋭い着眼点でトークテーマを設定いただき、イベントを企画・実施なされた細胞分子工学研究部門の若手WGの皆様、登壇された赤木さん、吉富さん、お疲れさまでした。

インタビュー

今回のトークイベントテーマを設定した理由を若手WGメンバーに、また登壇者のお二人には引き受けた理由なども含めて簡単なインタビューを行っており、以下にご紹介いたします。



左から、吉富さん、赤木さん、吉原さん

編集部：第1回を受けて研究紹介の流れだと思ったので、今回のトークテーマは斬新に映りました。なぜ『研究者の出産・育児に関するワークライフバランスについて』だったのでしょうか。

— 第1回のような研究紹介も新たな知見を得る機会として魅力的です。ただ、研究のトピック紹介では他領域・部署からの参加は難しいと思いました。産総研は若手の採用人数が増えているので、入所から数年以降に起きうるライフイベント『出産・育児』は、きっと産総研に入所したての研究者に共通する悩みであろうと考えました。出産を経た直後の研究者は、それだけでなく日常生活を頑張っているのに、さらに研究面でも頑張って、というプレッシャーを感じてしまうのではないかなと思っています。ちょうど部門内にも育児中の研究者(赤木さん、吉富さん)がいましたので、経験談の紹介を打診したところ、熟慮させてしまいましたが最終的にOKをもらえました。(吉原さん)

編集部：(登壇のお二方にご自身の体験談を共有してもよいと決意された特段の理由があれば教えてください。

— 正直なところ悩みました。ただ、ライフイベントに関する情報を共有できる同世代の研究者にオンタイムでは知り合えず、悩みを一人で抱えてしまった自分の経験から、情報提供の側として微力ながら貢献できるのでは、と思い至りました。(赤木さん)

— 男性も育休を取得して夫婦で育児、が普通の世の中となりつつありますが、研究者としては業績面への影響が気にならないわけでもなく、どちらも大切に思うからこそ葛藤を共有できるのではないかと思います。(吉富さん)

編集部：『ワークライフバランス』の実践は、実はご苦労が絶えないと思います。心がけていることがあれば教えてください。

— 家庭に振り向ける時間を確保すると勤務時間が短くなるのは必至なので、時間的制約を意識した実験スケジュールの組み立てをするようになりました。(吉富さん)

— 入所直後は、『まずは手を動かしてみる』の実験スタイルでしたが、どうしても時間の制約があるため、目的達成に真に必要な実験を吟味して効率的に結果が得られるよう切り替えを図っているところです。(赤木さん)

編集部：長期の休暇を取得することに対する不安にも言及なさっていましたが、産休・育休を経た現在において、何か受け止め方が変わったというようなことはあるのでしょうか。

— 研究ありきの生活だったので、産休中は職場復帰できるか不安でした。出産・育児の経験を経たことでその優先順位は変わりましたが、社会課題が子供の代までに解決できれば、と目的の捉え方に変化があり、研究が楽しく感じられています。(赤木さん)

— 少し古い考え方もかもしれませんが、子供を育てていくために研究をもっと頑張らないと、という責任感が芽生えた気がします。(吉富さん)

お二方とも、様々な制度が整備されている産総研だったので、研究者として出産・育児がしやすい環境を構築しやすいのではと感じているとのことでした。

最後に、登壇された赤木さん、吉富さんから、以下の様にコメントを頂戴いたしました。若手WGの吉原さんも含め、インタビューにもお付き合いいただきありがとうございました。

登壇者コメント：赤木 祐香さん



『働き方や家庭の形が本当に多様になってきて、育児も「正解が一つ」ではなくなってきたと感じます。だからこそ、誰かのやり方をそのまま当てはめるのではなく、それぞれの事情や考えを尊重しながら、選択しやすい環境が広がっていくといいなと思います。私自身もまだ試行錯誤の途中ですが、自分なりに工夫しつつ、周りにも相談しながら、少しずつ前に進んでいけたらと思います。』

登壇者コメント：吉富 廉さん



『研究者を含む多くの働く方々にとって、育休や育児に対して不安を抱くことは珍しくありません。本記事が、そのような不安の解消に少しでもお役に立てれば幸いです。』

若手紹介 佐々木 大輔 研究員

健康医工学研究部門
細胞機能解析研究グループ



・研究内容

私は、近年大きな注目を集めている細胞外小胞の研究に取り組んでいます。細胞外小胞は、ヒトをはじめとする動物・植物・微生物など、細胞構造を有する生物が生体内や細胞間で情報や生理活性物質を伝達する際に放出する微小な膜小胞です。内包する核酸やタンパク質、脂質などを標的細胞へ効率的に送り届けることができるため、副作用の少ない新規治療法やドラッグデリバリー技術への応用が期待され、ここ数十年で急速に研究が発展してきました。私は特に植物由来の細胞外小胞に着目し、疾患治療や機能性素材としての可能性を探究しています。四国には地域特有の植物や未利用バイオマスが豊富に存在し、新たな小胞資源を見出すうえで極めて恵まれた環境があります。細胞を用いた分子生物学的解析、生物発光レポーターアッセイによる作用機序の解明、最適な保存・調製方法の確立、さらにマウスなどの実験動物を用いた有効性・安全性評価まで、多角的なアプローチを組み合わせ、基礎から応用まで一貫した研究を推進しています。

・目指す社会実装

細胞外小胞研究はこの数十年で大きく進展し、起源や機能に関する基礎的知見は着実に蓄積されてきました。今後は社会実装の段階へと移行することが求められています。しかし、多様な細胞外小胞が報告されている一方で、それらをいかに産業利用へ結びつけるかという視点は十分に議論されていません。特に、製品化に不可欠な保存工程においては、細胞外小胞の安定性が低く、最適な保存法が確立されていないことが大きな課題となっています。そこで私は、豊富な植物資源からユニークな特性を持つ細胞外小胞を探索し、レポーターアッセイを中心とした手法で生理活性を明らかにするとともに、保存条件や調製法の最適化を進めています。安定的な大量供給体制を構築することで、細胞外小胞を基盤とした機能性製品の開発を実現し、研究成果の社会実装につなげたいと考えています。

・産総研の良いところ

産総研には多様なバックグラウンドと専門性を持つ研究者が集い、社会課題や学術的難題に対して多角的に挑戦できる環境が整っています。先端設備や充実した研究基盤が備わり、恵まれた環境のもとで高度な研究を推進できる点も大きな魅力であると思います。さらに分野横断的な連携が活発で、研究者同士が協力し合いながら新たな発想や技術を生み出しているところも他の研究所にはない点だと思います。さらに外部機関との共同研究も盛んで、議論や実践的なコラボレーションを通じて成果創出や社会実装へとつながられる点も強みであると考えています。

・メッセージ

産総研の研究者はみなプロフェッショナルであり、様々な分野の研究者がいることで、分野横断的・総合的な課題解決ができる、非常に頼もしい研究機関だと思いますので、ぜひ多くの方とコラボレーションしていけたらと思います。

■発行 国立研究開発法人産業技術総合研究所
生命工学領域

〒305-8560 茨城県つくば市梅園 1-1-1 本部・情報棟
<https://unit.aist.go.jp/dlsbt/index.html>

■編集 生命工学領域 研究企画室

■第 41 号：2026 年 3 月 6 日発行
本誌記事写真等の無断転載を禁じます。

© 2026 AIST

